

ICT機器で学び合いを促し 子どもの考えを更に深める

山形県 寒河江市立高松小学校

新課程では、教科指導でのICT機器活用など情報教育の充実が示されている。寒河江市立高松小学校は、ICT機器を使うことにより、子ども同士の学び合い・高め合いを引き出す工夫を凝らしている。授業と家庭学習を連動させるツールとしても、ICT機器の可能性を模索している。

未来を生きる子どもたちに 付けたい力

価値観の多様化、グローバル化が進む中
異質な人たちと文化の違いを乗り越えて
共に社会をつくる「共生力」

高度に情報化した社会で
ICT機器を道具として使いこなせる力

新課程を踏まえ 大切にしている取り組み

- ◎ 1人1台のタブレットPCや大型の電子黒板を活用し、考えを共有・理解することによる「学び」の深まり
- ◎ 互いの良さの発見と課題解決につながる「学び合い」の授業の展開
- ◎ デジタル教科書、教材、情報端末などを利用した指導方法の開発

◎ 背景

幼少時から集団が固定化し なかなか殻を破れない

山形県の中央部に位置する寒河江市は、さくらんぼの産地として知られ、豊かな自然に恵まれた土地だ。寒河江市立高松小学校の子どもたちの家庭は、祖父母と同居する三世代の兼業農家が多い。祖父母を中心に、子どもの見守り隊が結成されるなど、家族ぐるみ、地域ぐるみで子どもたちを育てようとする気風がある。

同校の普通学級は6学年全て1学級で、転出入をする児童はほとんどいない。子どもた

S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年に開校した八楯・谷沢の両学校が前身で、130年以上の歴史を持つ。2010年度から総務省「フューチャースクール推進事業」、11年度から文部科学省「学びのイノベーション事業」の実証校。



校長 伊藤順一先生

児童数 142人 学級数 7学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒990-0525 山形県寒河江市大字米沢643-2

TEL 0237-87-1022

URL <http://academic3.plala.or.jp/takamatu/>

公開研究会 2012年11月20日(火)(予定)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

ちは、幼少期から小学校卒業までずっと同一の集団で過ごすことになる。このため、「勉強が得意なのはAさん」「走るのが速いのはB君」というように、集団の中での役割が固定化されてしまう面があると、伊藤順一校長は説明する。

「子どもたちは素直で明るく、言われたことは真面目に取り組みます。宿題をしてこない子どももほとんどいません。その反面、自分の殻を破ってまで力を伸ばそうとする意欲が、若干足りない傾向が見られます。中学校に進学すると5つの小学校から子どもが集まってくるので、更に社会に出たらもっと多様な人とかかわり合いながら社会を構成することになります。子どもが大人になった時、どのような力が大切になるのか。本校では、自分の考えを主張できること、相手の話を耳を傾けられること、そして、互いの立場を考えてより良い社会をつくっていくことの3つであると捉え、子ども同士が学び合い、高め合うことによって、自ら伸びていくこうとする子どもの育成を目指しています」

◎取り組み内容 意見をICT機器で分かりやすく示し 子ども同士の学び合いを促す

子どもの実態と新課程での趣旨を踏まえ、同校が大切にしているのが「学び合い」だ。

「新課程では、言語活動や体験活動、道徳

など、7つのポイントが示されました。これらを意識して取り組むことが私たちに求められていますが、あれもこれもと取り組んでいては、10年後に振り返った時、結局、何も変わっていないことになりかねません。本校では学び合いを柱とした教育計画を組みました。自分の考えを持ちつつ、他者の意見を合わせてより良いものをつくっていきける力を子どもたちに付けたいと考えています」（伊藤校長）

そのために活用しているのがICT機器だ。2010年度、総務省の「フューチャー・スクール推進事業」の実証校に指定されたのをきっかけに、同年秋には、全校児童に1人1台のタブレットPCと、全普通教室に77インチの電子黒板が配備された。更に、校内のどこでもインターネットに接続できる無線LAN環境なども整備された。教務主任の石澤紀雄先生は、ICT機器の位置付けを次のように説明する。

「一般的に、ICT機器での学習という機械と勉強しているというイメージが強いかもしれませんが。しかし、本校では『人と人がかかわる道具』の1つと捉えて学習に取り入れています。タブレットPCや大型電子黒板を使い始めてから約1年半経ちますが、子ども同士の学び合いの場面で効果的に使われるようになりました」

例えば、子どもがタブレットPCに書き込



寒河江市立高松小学校校長
伊藤順一 いとう・じゅんいち
「子どもや保護者、地域から信頼される学校をつくりたい」



寒河江市立高松小学校
教務主任。ICT機器の活用を推進している。
石澤紀雄 いしざわ・のりお
「お互いのかかわり合いを大切に出来る子どもを育てたい」



寒河江市立高松小学校
研究推進員、4学年担任。ICT機器の活用を推進している。
石山志保 いしやま・しほ
「子どもの意見を傾けることを大事にしたい」

んだ内容を、電子黒板にほぼ同時に表示できる機能がある。電子黒板を4分割にすれば4人の内容を比較でき、9分割にすると9人の画面をパツパツと変えながら見比べることが出来る（P.20写真）。一度に複数の子どもを考えを比べられるメリットは大きいと、4学年担任の石山志保先生は話す。

「子どもは他の友だちの考えを即時に知ることが出来ます。そして、その時に気付いたことも自分の画面に書き加えられます。机を動かすなどの作業が減った分、話し合いや1人で考える時間が増え、子ども同士の学び合いを促し、子どもにより考えを深めさせることが出来るようになりました」

子どもがタブレットPCに書いた内容を、教師は自分のPCだけで見ることが出来る。



写真 2年生の国語の授業の様子。9分割された電子黒板には、子どもが書いたタブレットPCの画面が巡回しながら映し出されていく

「モニターを見れば、何も書いていない子どもが誰かがすぐに分かるので、効率よく一人ひとりを指導できます。更に、教師が机間指導をする時間を他の活動に使えるという利点もあります」(石山先生)

他にも、電子黒板にデジタル教科書を映しながら授業を進めたり、動画コンテンツを流したりと、ICT機器を授業のさまざまな場面で活用している。

「タブレットPCや電子黒板を取り入れた当初は、何でも出来る魔法の道具のように感

じていました。しかし、実際に使ってみて分かったのは、授業をするのはあくまでも教師だということです。子どもの学びを深めるためには、どのようにICT機器を活用すればよいのか。教師の授業構成力が問われるのです」(石澤先生)

更に、伊藤校長は、学び合いには教師の聴く姿勢も大切だと話す。

「先生は、子どもに問い掛けて正解が返ってくる、『しめたもの』と思ってしまうがちです。しかし、正解だけを求めていると、子どもは次第に話さなくなったり、教師が求めていることを考えて答えを言おうとしたりするようになります。それでは、子ども同士の学び合いや高め合いにつながりません。大事なのは、子どもが『間違ってもいい』『この先生なら聞いてくれる』という安心感を持つことです。そのために、先生方には『とにかく子どもの話を聞いてください』と伝えています。『間違えてくれたから、みんなが考えることが出来たね』というところから学び合いが始まるのです」

授業と家庭学習の連続性を生み出す取り組みに着手

授業でICT機器の活用を2年間進めてきた同校が、12年度から模索しようとしているのは、ICT機器を活用して家庭学習との連携を進めることで、子どもの学びをより深め

ることだ。

「社会科でごみの学習をする時に、タブレットPCに付いているカメラでクリンセンターの写真を撮影してきたり、インターネットでごみについて調べてきたりする子どもが出てくることでしょう。家庭で学んできたその内容を次の授業で共有することによって、他の子どもも勉強の進め方が分かり、学びが更に深まるという好循環が出来ることを期待しています」(伊藤校長)

伊藤校長は、子どもが予習をし、その内容を踏まえた授業の実現を視野に入れる。タブレットPCを家庭に持ち帰り、インターネットに接続すれば子どもたちは家庭学習ができると共に、教師はその様子を把握できるようになっている。前日の家庭学習状況を踏まえて、次の日の授業を組み立てることも可能だ。

「授業の終わりに次の授業で行う問題を提示して、『次はこういう勉強をするよ。ちょっと解いてきてみて』と、次時への導入を試しています。例えば、算数では、家庭学習で立式が出来ていなければ、問題文が分からないことが想定されます。逆に、立式が出来ていれば、授業で問題文に戻らなくても答えの求め方を重点的に指導すればよいかもしれません。ICT機器を使うことによって、授業のサイクルを少し変え、家庭学習と学校の学びを新しいスタイルでつないでいけないかと考えています」

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

ICT機器に限らず、家庭との連携は強化していく方針だ。家での読書やノーテレビ・ノーゲームによる家族の会話を促すなどの取り組みを進めていく。この取り組みを推進する校務分掌として「連携部」（仮称）の設置も検討している。

同校は、12年度、新課程に掲げられた体験活動と言語活動の関連付けにも力を入れる。例えば、5年生の社会科における米の学習では、これまでは米の「生産」が目的だったが、「売り上げを寄付する」を最終目標にするこ
とによって、学習に変化が生まれた。売るためにどうすればよいのか、ネーミングやチラシ作りなど、言語活動にも関連した活動となった。こうした取り組みを今後、充実させていく考えだ。

●学校経営の工夫 担任の力を引き出す 同僚性を大事にしたい

石澤先生は、担任が自信を持って教育活動に当たれるように支えていきたいと話す。

「新課程では、授業時数や学習内容が増え、教科書も変わりました。加えて、本校ではフューチャースクール推進事業などもありました。先生方にとって大変な1年ではありましたが、チームワークで大きな成果が得られました。2年目も、出来るだけ先を見通した計画を示し、授業をより良くしていきたいと

思います」

同校には、元々ICT機器に詳しい教師がいたわけではない。教師の平均年齢は約52歳と高く、ICT機器の扱いがあまり得意ではない教師がほとんどだった。石山先生は次のように振り返る。

「ICT機器については、ほとんどの教師がゼロからのスタートでした。『使いこなせるか』と不安でしたが、本校に常駐するICT支援員や外部の大学教授らの支援を受けながら、職員室で日常的に情報交換したり、校内研究会を開いたり、試行錯誤を続けました」

教師全員が力を合わせ、悩みながらも取り組んできたという経験は、教師の同僚性にも結び付いている。

「本校は、教師も子どもも人数が少ないです。一人ひとりの存在感が大きくなります。『互いの良い点を学んでください』『言いたいことがあるば、遠慮せずに話してください』と先生方には伝えていきます。良いことも気になっていることも互いに話せるような同僚性によって私たちが成長していかなければ、子どもたちが伸びるはずがありません。子どもたちの個性が豊かなように、教師も得意な分野はそれぞれ違います。互いにカバーし合うことを大事にしなから、2年目も新しい課題にチャレンジしていきたいと思います」（伊藤校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

学校の主人公は子どもであり、子どもたちを導くのが担任の役割です。ですから、子どもと毎日向き合う担任が教育活動しやすい環境を、私たち校長や教頭、主任が整えていくことが大事です。校長が目的をしっかり示し、教頭が目的に向かって進む手段を決め、教務主任はいつ、どのように行うのか具体策を決め、そして、実際に子どもを引っ張っていくのが担任です。こうした連携を大切にして学校経営に当たっています。

校長 伊藤順一先生

ミドルリーダーの役割

教務主任の役割は、校長や教頭と担任の先生方をつなげることです。私は、先生方にとって、小さなことでも質問したり、困ったことがあったら相談したりしやすい存在でありたいと思っています。

そのため、年間計画など先の見通しを具体的に示すことによって、「忙しいけれども楽しい」という雰囲気をつくることを、大切にしています。

教務主任 石澤紀雄先生